
部長も僕も嘘つきな小説

しいじい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

部長も僕も嘘つきな小説

【Zコード】

Z6770Y

【作者名】

しいじい

【あらすじ】

ピクシブで掲載している小説です。ピクシブの人気がこちらの小説を見つけたりできるのでしょうか。一応、私の全力ロリババア小説です。

一話（前書き）

こいつは私の趣味前回のロリババアを書きました。そういう特
殊なマイノリティが苦手な人は敬遠なさつてくださいませ。以上で
す。一日ずつに更新していくかと思います。気長にお付き合いく
ださつたら幸いです。

来年の抱負。

ノーと言える男。

恐らく、無理。

なぜ？

肉体的弱者にして、精神的弱者である僕は何も答えられないからね。いやいや、別に体が弱いとかそういうわけじゃないんだけどね。こう、なんていうのかな必然的にそうなつてしまつ理由があるとうか、なんというか。

その話は別にしなくていいんだ。だって、ただの言い訳になりそうだし、さらにみじめになりそうだし。だから、しない。しないつたら、しない。いつかするけど。しなきゃいけないけど。今はしない。

それは唐突だった。

新入生は新しい制服にも慣れて、気が緩みだすこの五月の曇天下がり。

「いきなりなのだけれど。岩屋君、写真を撮つてきてちょうだい」週一の部会で、部長から拝命賜つた指示は、「川の写真を撮つていい」とのこと。

「しかし、なんでまた川の写真なんですか？」

正直、体力がない僕としては勘弁願いたいものだ。だって、きついもん。

「川じゃないと、駄目なのよね。空では駄目だし、海なんて論外。といつわけで、川の写真を撮つてきてちょうだい」

偉そうに腕組みして、眉を八の字にして、悩む部長。

「答えになつてません。そもそも、文芸部なのになぜ写真が必要な

んですか

「だまらっしゃい。私が行けと言つたら、黙つて行きなさい」

「それと、部長。椅子の上に仁王立ちするのはやめてください。後

から掃除するのは僕なんです」

ああ、情景描写が足りないなあ。簡潔にいこう。簡潔に。僕。部長。部室。一人っきり。故に部員は一人。悲しいかな。僕は彼女の舍弟。僕と部長は長机を挟んで対面する形。僕は椅子に腰かけている。部長は椅子の上で仁王立ち。しかし、小さい。何とも悲しくなるほどに小さい。胸も小さいし、背も小さい。しかし、それが良い。注意書き、僕は変態ではないです。

「ほう、岩屋君。私が常々気にしていることをそんな風に言つちやうんだ？ 私傷ついたわあ。人の身体的特徴をそんな風に言つちやうなんて」

「僕はなにも言つてませんよ」

「きみの視線が物語つているのよ」

部長の視線が冷たい。しかし、謝つたりしたら、さらりと怒るから何も言わない。

僕は挨拶もそこそこして、部室を後にした。

一話（後書き）

学生時代のうらぶれた気持ちが私の作品の原動力でござります。

1. 説明（前書き）

この更新は予定更新をしています。初めての機能なので、ちょっと
ドキドキです。

いきなりの回想。

四月一日。

入学式前の登校日。皆が皆互いの様子を伺う教室の空氣。新学期に向けての期待と不安で胸いっぱい。僕は不安で胸一杯。

教師が何か注意事項を話して、「以上です」との言葉で、締めくくつた。すると、皆がバラバラに歩き出して、どこかへ向かい始めた。

僕は教師の話を全然聞いていなかつたので、この後の動きがまるでわからず、ただ皆が歩く方へと付いて行つた。なんと立派な協調性だろうか。我ながら辟易する。

皆が行きついたのは、体育館だつた。周りの同学年達の聞こえてくる話し声から察するに、今から、部活紹介が行われるらしい。誰とも、話すことなく部活紹介の時間がくるまで、静かにしていた。だって、初対面の人と話すのは恥ずかしいので。

一つの部活あたり、与えられた時間は五分。

その五分の間に各部活は様々な趣向を凝らしていた。部活によつては真面目な紹介もあれば、笑いを取りに行く部活。

見事にスベツた部活。笑いによつて場を和やかしてくれた部活。この後から、各々興味のある部活を見に行くというわけらしい。

運動部の紹介が終わり、次は文化部となつた。

文化部というと、やはり、おとなしい人が多いのか、運動部ほど活発な部活紹介はあまり見られない。

問題はここだ。

文芸部の部活紹介が始まつた。

マイクを持つて、一人の少女が新入生の前に出た。

皆、ぎょっとした様子で少女を見つめた。

高校生にふさわしくない容姿。

道に外れた格好をしているわけではない。制服は学校指定の紺色の一品だ。スカートは膝まで隠れているわけだし、何も問題はない。しかし、大きさが問題なのだ。

目測だが、身長は百二十に満たないだらう。ていうか、性格な数字は知つてゐるし。だけど、明記はしない。死にたくないからね。命は大事にしよう。

腰で切りそろえられた黒髪は見た目の年齢に見合わない程の髪の量を誇つていた。

それがまた、見る者を釘付けにする不思議な魅力を持つていた。僕は咄嗟に顔を伏せた。木を隠すなら森の中とはよく言ったものだ。今の僕は完全にその他大勢としてまぎれている。完璧だ。なにも問題はない。

彼女が周りのざわめきを物ともせずに、部活の紹介をこなした。生徒会の生徒のアナウンスで同級生達は思い思いの部活へと繰り出していくた。

僕は、周囲にまぎれるようにして体育館の外へと向かう。一刻も早くここを出なければまずい気がした。違う、確信だ。

しかし、僕の予測は甘かつた。

彼女はどのようにしてか、僕を見つけた。

僕は捕らえられた。

どこかの刑事ドラマで見た犯人が取り押さえられるシーンを想像したら間違いはない。言つまでもなく僕が犯人役。たしか、ドラマでは胸のたわわなお姉さんだったから、犯人はムフフな状態だったけれど。僕にはそんな役得はない。

「偶然とはまさしくこのことだわ。私の右腕とあなたの右腕ががつちりと絡まつてしまつた。これも何かの縁。さあ、さつそくこの入部届けにサインをしてもらいましょう」

「お願いします。許して下さい。本当に出来心だったんです。なんというか、臆病の虫が湧いたんです。壇上に立つその姿を見たときにもまぶしくてみていらぬなかつたんです」

勿論、真っ赤なウソだい！

「あら、仕方ない。もうほんとに申し訳ない。なんとかしないといけないわ。そのためには、あなたは文芸部に入るしかないわ。さあ、この入部届けにサインをしましょ。これ以上ガチャガチャ言うならお仕置きしちゃうぞ」

黙れ、ばばあ。俺は見た目に騙されない。あなたの年齢を知つている。

「きみ、今なんつった？」

「なにも申しておりません。ええ、決して。この瞳が嘘をつくと思うのですか？」

瞳見えないけどね。

乱暴者は俺をそのまま、文芸部のブースに連れて行って、無理やりサインをさせた。字が歪んでいたのは、僕の心の震えなのか、腕の痛みなのかは定かではない。

一話（後書き）

スタートダッシュがおなじことに定評のある作者で、ぜひこまか。

三話（前書き）

予約掲載で一時間ごとに掲載をするとどう試験的策略。一話目を知らない人は一話目へゴーです。

以上回想終了。

かくして僕の所属する部活は強引な勧誘によつて決定した。後悔はないのか、と問われたら叫んで夕日に向かつて走り出したい程に後悔している。だから、自問しない。

それによくよく考えたらあれば部長なりの気遣いだつたのかもしれない。部長とは学外においても付き合いのある古い友人なのだ。年下の優柔不斷な友人を無理やり引っ張つてでも面倒を見てあげようという優しさなのかも。決して、ただこき使える舍弟がほしいわけじやなかろうよ。

そうだそうだ。今、さらつと言つたけど、僕と部長は付き合いのある友人なのだ。だけど、これもここでは深くは書かない。だつて、話が脱線してしまつだらうから。

結局、いつかは書くだらうし。

最寄りのバス停でバスを待つ。学び舎というのは孤高なる立地に立てるのが流行つていたのだらうか。

僕が通う高校では、山の天辺に校舎を構え、交通の不便は限りない。近くの団地に住む者を除いて、多くの者はふもとまで降りなくてはいけない。

歩いて降りて行く者。地域住民の冷たい視線を受け流しつつバスに乗り込む者。様々である。僕は冷たい視線を受けながらバスに乗り込む人間だ。

バス停に並ぶ。

そう言えば、明日から大型連休だ。なのに、僕は友人と遊ぶ予定もなく、部長の指示で川へと向かうのだ。いやおうにも気分が沈む。見てみる。周りの学生のあの明るい顔を。彼ら、彼女らはなんであんなにも晴れやかな顔をしているのだろうか。それは暴君たる部長がいないからだろう。

この要因はかなり大きいぞ。

ああ、悔しい。ああ、口惜しい。もし、僕が彼女の制止を振り切つて、それこそ、華やかな部活へと入部していたら、今の僕はないのかも知れないのに。

可愛いマネージャーがいてほしいです。

僕の汗を拭う優しいマネージャーがいてほしいです。

というか、異性との触れ合いがほしいです。

部長は論外。彼女は……ねえ？ 色々と残念だし。期待はしないのさ。

想像力逞しい僕には文芸部というのは案外性に合っていたのかもしない。

部長に感謝感謝。

四語（複数形）

雑談とこののはこのものですね。

玄関を開けると見た目十歳程の少女がいた。前かがみになつて、靴ひもを結んでいる最中だつた。残念ながら胸はない。ほんとに残念だ。

我が家である。明らかに俺より、若く見えるが姉である。部長と同じ類のものだ。

柔らかそうなほつぺの持ち主である。すげえ、ひっぱりたい。果物で言うなら、桃みたいな感じ。

「おかえりなさい」

「ただいま。そして、いつてらつしゃい」

「いつてきます。夕飯は何が食べたい？」

「なんでもいいや。適当に美味しいものを」

僕の言葉を聞くと、姉は挨拶もそこそこにマイバックを背負い、歩き出した。マイバックは彼女の体程の大きさはある。小さいものが、大きいものを持つていると、それだけで保護欲が掻き立てられる。

母は家を留守にすることが多い。必然的に家事をこなすのは年長者の姉となつていた。

九年前に高校を卒業した姉は、そのまま家に残り、家事手伝いとしての日々を過ごしていた。

姉が家事を行うようになつてから、母が家を空ける頻度は多くなつた。恐らく、家にかまわないでよくなつたからだろうか。

姉は日がな一日中、家事をしているか、パソコンをしているか、読書をしているかの三つに分かれるというインドア派な女性だ。

僕は部屋に戻り、大型連休の課題に手をつけては、その難解さに頭をひねらせて思考のループに陥つていると姉が帰ってきた。

玄関まで行き、姉の背負うバックを受け取る。軟弱な僕の腕では持つことすらままならない重さだ。しかし、ここであきらめては男

が廃る。

「夕飯の催促？ ちょっと待つててね、すぐに作るから
後ろの方から、僕を追つよつとして声が届く。とつとつとつ
軽い音を姉が鳴らす。

「いや、別に夕飯の催促とかいうわけじゃあないんだけど
「じゃあ、何」

「姉さんはデジカムって持つてたよね。あれ貸して
「ないこともないけど、探すのが面倒臭いという私の本音は隠すべ
き？」

「僕に言つのは間違つたかな。そこを何とかならない？ お願
い」

「しかし、急な話ねえ。なんでもまたカメラがほしいのよ」

「部長の指示で写真を撮りに行くんだ。その為に風景の記録用とし
てカメラを貸してほしい」

「ああ。亜子ちゃんの指示か。しかし、風景を撮るためにか…… 気
合いで写生して来なさい」

「無理言つな。僕の美術の評定は2なんだぞ。新しい何かが紙の上
で生まれてしまいそうだ」

「大丈夫よ。あなたはデキルコツテ私はシンジテルから」

「言葉に力を持たせるなら、片言はよしてくれ。そこまで、僕に力
メラを貸したくないのか」

「だつて、カメラ探すの面倒だもん」

「あんだと？ 可愛わで「まかせるとか思つてんのか。このロリバ
バア。」

「ロリババアだなんて、卑猥だわ！」

「そうですか。俺には地の文におけるプライバシーすらも存在しな
いのですか。」

「大体、あなたは考えていることが顔に出やすいのよね。さつきだ
つて、私が言った。気合いで写生しなさい発言も脳内ではどんな誤
字変換が起きているか分かったものじゃないわ

「…………」

無心だ。考えるな、感じるんだ。落ち着け。深呼吸。
「わかった。僕はカメラを貸してもいいの？ 貸してもいいの？」

気合いでバックを冷蔵庫まで運ぶと、床に下ろした。
重量感溢れるバックの沈む音。

しかし、またそれを軽々と持ち上げる小さな手。

「ごめん、こっちだから」と、バックをキッチンの方まで片手で運んでいった。僕の何かが崩れそうになる。

そうだ、彼女はその見た目に似合わず、素晴らしい臂力の持ち主なのだ。

これでは僕が卑屈になってしまつのも仕方ないだろ？ 僕丈は小学四年を迎えるころには、追い抜いたものだが。

こればかりはどうしようもない。

「さつきのカメラの話だけどねえ。部屋の模様替えを手伝つてもいいましょうか」

そういう小さい姉の様子は、どこか楽しげに見えた。

五話（前書き）

探究心なんてかけらももちませんな

「ほり、はやく

姉に促されて僕は姉を抱き上げる。

「どう?」

「うん、なかなかいい感じ」

姉は小さい。故に高いところに手が届かない。

そこで、俺の登場。

棚の上の写真箱を持ってきて、蛍光灯を替えて、私を抱っこして、などなど、様々な命令を要求してくる。今まで、何度も部屋の模様を変えを手伝ったことがある。その時も散々こき使われた。

今は、姉を抱き上げて、部屋の点検をしていた。「高い視点から周りを見ることは大事なことだわ」とのこと。

やはり、改めて思うが姉は小さい。こんなに軽い身体に一一体あのエネルギーはどこに詰まっているのだろうか。

「よし、オーケー。問題なし」

「しかし、ところがどうい姉ちゃん。まだ問題はあるのだ」

「さあ、なにかしら、まったくもつて問題点が浮上しない部屋だけれど」

「肝心のデジカメが見つかっていない」

「.....」

お~お~い、だんまりですか。僕があんたのわき腹を握っていると、いうのはわかつてらっしゃるのかい? これから、超絶笑いの地獄に落し込んでやることも可能なんだぞ。

「他に探していい場所のところあたりはないの?」

「ないこともないけれど.....」

そう、言葉を発する姉は浮かない顔をしている。

僕の周りには隠し事が多くある。隠しじ」というのは隠してこそものだらう。しかし、彼女は僕に隠しじとの存在すら隠せていない

い。

」の様子だつたら、僕に見せたくない場所にあるのかもしねい。
なら、僕は一旦退くべきだろう。

「ふん。じゃあ、僕は部屋に戻つとくから後から、カメラを持って
きて」

「うん、ごめん」

そんな風に謝られたら、とても氣まずい。別に悪いことはしてないさ。ただ、話したくないことなんてのもあるだろうぞ。しかし、僕はそれに関して何も言つことはしない。今までそつだつたし。妙な事情なんて知りたくない。

痛い目に遭いたくない。

僕は姉を床におひして、退出した。うつむいたままの姉の様子が
みじめだつた。

六話（前書き）

余談ですが。私は乙一の短編の「陽だまりの詩」が好きでした。作中の小説もそいつた要素を含んでいます。乙一の作品が苦手な方は「」注意を。

姉の部屋を出て、自分の部屋へと引っ越し。もやもやとした気分で、愛読書を読み始める。

それはある短編で、製作者を埋葬するために作られた「アンドロイド」の話だった。

僕がこの話を知るきっかけとなつたのは、姉だった。ような気がする。確か、僕が小学四年生だったか、僕はついに姉の背を追い越すことができた。そのことを事あるごとに他ならぬ姉に自慢していた。

小学四年生というと、姉は高校を卒業したころだ。僕が家から帰つてくると、姉はいつも本を読んで過ごしていた。見た目は同級生と変わらない姉の様子を見ていると、ちゃんとちゃんとおかしく思えた。生来からの読書好きというのもあつたのだろう。しかし、姉はこうさらその作者の本を集めていた。母も、その本を集めていたきらいがある。僕が本を部屋に持ち込み、返すことに、母はその本を紛失したと思い、すぐさま古本屋で同じ本を買い求めてくるのだった。

その本が書斎にないという状態が母は落ち着かないらしい。

そして、書斎にはだれも使用していない机があつた。長いこと放置されたままの様な机があつた。

これは推測の域を出ないけれど、もしかしたらあの机は父の物なのかもしれない。

.....

好きな作品というのは何度、読んでも胸を打つものがある。

最期のアンドロイドの主人公と、製作者の語りが物語に緩やか収束を予感させていく。

最後の見開き一ページ。製作者の謝罪。アンドロイドの否定。生とは、死とは。

最後の結論。

物語の余韻に浸っていたら、隣室の部屋から重量のある物が落ちる音がした。隣の部屋は姉ちゃんの部屋だ。何かを落したのかもしない。

万一にも、姉ちゃんには怪我はないだろうけれど、何かアクシデントが起きた時の心細さは限りないものがある。部屋の中で、座り込んだままの姉ちゃんを想像したいたまれない。

一旦、部屋を出て、姉ちゃんの部屋をノックする。返事を待つ。返事がない。

万一の事態？ いやいや、かなりまずい。頭でも打ったのかも。

「姉ちゃん、大丈夫！」

部屋の様子。倒れた椅子。倒れた姉ちゃん。覆いかぶさる本の数々。胸を見ると、上下している。生きてはいるようだ。

山となつた本を払いのけて、姉ちゃんをサルベージ。

「何があつた？」

「ちょっとばかし転んだわ。もう私は無理。後はよろしく頼んだわ。ガク」

自身で効果音を用意する程度には、元気なようだ。恐らく、高いところにある物を取ろうとして、失敗したのかもしれない。

「怪我はないようなんで、僕は部屋に戻る」

立ち上がるうとする僕を姉が掴む。それが弱々しい握り方なら愛嬌もあるのだろうが、青あざの心配をしなくてはならないほどだ。

「あなたは、この状況を見て、放置するというの？ 私はそんな風にあなたを躊躇た覚えはないわ」

しかしながら、それこそ妙なものを見つけた口にはたまつたものじゃない。

「大丈夫、これらの本を元に戻したらすぐにカメラを用意するから「わかつた。必ず、カメラの用意を頼むよ」と言つて、部屋の整理をまた始めた。

姉が散らばつた本をまとめて僕に渡す。僕をそれを受け取つて、

指示通りに本を並べていく。

姉ちゃんが所有している小説、教養書等々。次は雑誌にまぎれて高校時代と、中学時代の卒業アルバムを並べた。

作業すること十分少々、作業はすべて終了して、姉ちゃんが指示した。

「ありがとう、助かったわ。カメラは本棚の上に置いているわ。だけど、決して他の物には触らないでね」

「わかった」

大丈夫さ。僕も僕の部屋にあるプライベートな物を触られたくないしね。

薄型のカメラを受け取り、礼を述べて、部屋を退出しようとした。その時、声が掛かった。

「そう言えば、風景って言えば、どの写真を撮りに行くの？」

「言つてなかつたつけ？ 川の写真を撮りに行くんだよ。場所は指定されてないから、僕に一任されてるみたいだけど……」

僕は言葉を失つた。姉の顔がみるみる内に蒼白となつたからだ。なにか失言でもあつただろうか。

約一秒間のうちに、ここ一分ほどやり取りを思い返してみる。特別思いあたることもない。

「…………そう、気をつけてね」

僕は姉ちゃんに部屋を追い立てられるかの様な気持で、部屋を後にした。

姉ちゃんの顔を見ることができなかつた。

七話（前書き）

ユニークアクセスがあると心がわくわくしてきますね。もしかしたら、私の小説を楽しみにしてくださる方がいるのかと思つと、うれしくて仕方がないです。

ああ、すがすがしき朝。曙光はやさしくせしにじみ、瞼を通して刺激を伝えてくれる。鳥も鳴き始めようがどうか迷う時間であるようだ。

耳を澄ませば、階下ではせわしなく動いていて音が聞こえてくる。姉ちゃんがその小さいからだを最大限に駆使して朝食を作っている様子が思い浮かぶ。

その音を耳にしていたら、このまま再び眠るのは申し訳ない気がして、のそのそと出かける準備をはじめた。昨夜の内に済ませておぐのがデキル奴なんだろうけれど、僕はデキナイ奴なんで、これでいいや。

動きやすいジャージに着替えて、デジカメの動作確認をして、リュックに必要と思われるものを放り込んでいく。

リビングまで行くと、味噌汁と焼き魚、そしてご飯が一人分ずつ盛られていた。

姉ちゃんは腕組みをしていた。傲然とした態度ですべての理不尽に戦いを挑むかの様である。

もしかしたら、もしかしなくても姉ちゃんは僕が降りてくるのを待っていたのかもしねれない。

僕が動けないでいると、姉ちゃんは僕に顔を洗つてくるように言った。

僕は言われるがままに顔を洗つた。洗顔して幾分明晰になつた頭で再び姉ちゃんの様子をつかがつ。人のコミュニケーション能力に乏しい事を自覚している僕ですら、姉ちゃんが不機嫌であるというのがわかる。

対面の席に座り、おじそかな雰囲気で朝食が開始された。今までここまで重々しい空気で食事があるだろつか。いや、ない。でましたよ、反語。

今日の味噌汁も美味しい。だが、魚の焼き加減が絶妙である。だが、空気を拭るために会話を試みるが、返事は曖昧なものだった。しまいには、目を伏せてしまった。すげえ、いたたまれない。僕の必死さはなに？

途中からむなしくなつたので、何もしゃべらない。いつしょに食事を取つているということは思つたほど絶望的な状況じゃないだらうさ。

何も会話をしないものだから、いつもよりも圧倒的に食事を終える。食器を流しにあいた。そのままリュックを背負い家を出ようとすると、声を掛けられた。勿論、姉ちゃんから。

「川に行くの？」

「うん。行つてくる」

「…………やめといた方がいいんじゃないかしら」

「なんで」

「なんででも。もしかして、川でおぼれるかもしれないでしちゃうが…………あの川でおぼれることができる人間がいたら連れて来て欲しい。川と一口に言つても様々なもので、潤沢な水を湛えた豊富な水量の川なんて近所にはない。僕の近所にあるのは、舗装整備されたコンクリートの川だ。晴れの日が続くと日に見えて川の水は日減りするし、雨が降ると驚くほど水量は増す。

そして、ここ最近は雨は降つていないから、川とは名ばかりで干上がつた通路みたいになつていてる。

「大丈夫だよ。僕はおぼれないからそんなに心配しなくていいよ。お昼までには帰れると思うから、お昼の用意、よろしく」

「…………わかった」

僕としては、姉がここまで機嫌を損ねる理由が思いつかない。

「そんないに、心配ならいつしょに来る？」

「冗談じゃないわ。私は部屋でこもつてている方が性に合つてているわ今まで、目を伏せていた姉ちゃんが顔を上げる。

今のは禁句だったのだ。と理解した。

七話（後書き）

次の更新は11月21日21時です。一時間ごとに更新いたします。

八話（前書き）

長広舌が大好きなんです。

家を出た時、朝の清涼な空気が僕の肺を満たした。頭がぐぢゅぐぢゅにしていたので、腹いせに電話してみた。三回一通で電話に出た。

『何かしら。何かしら。こんなに朝早い時間にね。私としてはオーナイトでゲームをしていたからこれからおやすみってな感じなわけだけど。もしかして、岩屋君からの川べりデートのお誘いかしら？ だけど、や～んね～んでも～した～。これから私はなにか大事な用事があるつていうか、出来たつていうか。なんていうか、まあ、そんなわけだから今日は岩屋君に付き合えないのよ。君に誰か誘える女の子がいないのは重々承知だけどね。本当にごめんなさいね。そしてね、何かきみ自身が戸惑うような事態が発生した途端に私は電話をかけるとか、その行動パターンが情けなくも、とても愛おしく見えてしまうのだけれど、そんな風に感じてしまつ私の嗜好は隠すべき？ ちょっと、文芸で小説を書く感じで、剽窃してみました。出典は岩屋君の悩みの種です』

「その部長の心は胸の内に秘めるほのかな痛みとして大事にしまつていてください。そして、奇しくも態度ににじみ出るような感じで僕に接してください。そしたら、部長も十分可愛らしくなるでしょう」

『驚いた。岩屋君って変態だったのね』

「黙らつしゃい。部長、頼みごとを一つ良いですか？」

『どうやつ～..』

「姉の事をよろしくあやしとつてください」

『任せときなさい』

電話を切つた後、僕は近所の適当なところと歩き出しだ。

八話（後書き）

次の更新は一時間後の22時でございます。私の小説は一話一話が短いので、読みやすくあるのではないかと自画自尊してます。だけど、読みにくいくと滅多打ちされます。めげません。頑張ります。

九話（前書き）

強い女の子は好きです。

近所に川がある。名前なんて知らない。だれも知らないだろう。だって、小さい川だし。昔話とかが残る程に由緒正しき川でもない。住宅街に何かの間違いかのようにしてある川なのだ。川が至るところに在るので、必要にかられて橋も在る。名前とかは調べればわかるのだろうけれど、だれも困らないからいいや。

僕の住む団地は、自然の山であつた所を無理やり切り開いて作られたそうだ。川を挟んで家々が建てられている。そして、その家の側面には山だ。北側の山は県内でも有数の「ゴルフ場となつていて、南側の山は新しい土地開発の為に山が削られている。土地がむき出しのままとなつているから土砂崩れの心配をしているのだけれど、心配だからと言つて何ができるわけでもなく、対策は講じていない。以上、優柔不断男の独白でした。

あまりにもな説明口調だから途中で恥ずかしくなっちゃうな。
部長からの指示は川の写真との事だったので、とにかく川の写真を撮りまくればいいのだろうけれど、どうじょうか。

僕の体力を考慮するなら、下流の方に行き、町をふらふらしながら川の写真を撮るというのがベストなのだろうけれど、しかし、それではまずいだろう。

わざわざ、風景としての川の写真を要求するのだから、上流の縁深い風景がほしいのだろう。

どうしようかどうしようか。今、僕の怠惰の心と、勤勉の皮を被つた臆病の虫が争つている。

結局のところ、勤勉の皮が勝利した。我が身が可愛いのだ。筋肉痛。精神的苦痛と肉体的痛み。比べてみたら前者の方がまだ良い。それに、今日は部長に姉の面倒を頼んだのだから、部長の願いことを聞き届けるというのは僕の精神的安寧にも一役買つこととなるだろつ。

そもそもの部分で姉の機嫌が悪くなつたのは、川に行くことが不機嫌の原因なわけで、川に行かねばならないのは部長の指示なわけで、どこのつまり、部長の所為なのだというのは念頭から外した。だつて、何を言つたとしても返つてくるのは理不尽だけだ。ならば、耐え忍ぼうじゃないか。だつて、部長だもん。オマージュしてみました。語尾に「もん」とか付けてみた。可愛いかもしれないな。

九話（後書き）

次の更新は23時です。ついてきてくださる方はいるのでしょうか。

十話（前書き）

みなさんはお姉ちゃんは好きですか？

川沿いに道を進む。舗装された川は落差が一メートルほどある。車が落ちるのを防止するためか、それとも人が落ちるのを防止する為かは定かではないが、白いガードレールがある。

しばらく歩くと、ガードレールがなくなり、川へと降りることが可能な場所がある。本来そこは川へと降りることを目的としたものではないだろう。降りるために地面を這いずりまわることになる。結果、僕の体は泥だらけになつて、心なしか生臭い匂いがするのは気のせいではない。

周囲の大人の中には、子供が川で遊ぶ事を強く咎める人がいた。当時小学生だった僕は怒鳴られることが怖くて、極力川には近付かないようになっていた。

なのに、なんで？

僕は川にいるんだろう？

部長の指示だから？

いや、姉ちゃんが不機嫌になつていて、それを承知の上で川の写真を撮るだなんてのは本末転倒かもしれない。僕は姉ちゃんに怒られるのが怖くはないのだろうか。いや、そんなことはないだろう。だつて、すげえ、怖いし。今だつて、後の事を考えてみたら足がぶるぶる震えてるし、胃がきゅっと締めつけられるかの様な感じがしている。ある程度、大きくなつた今なら想像がつく。僕の住む県は水難事故が多い。説明すると長いから、短く説明してみる。単語の羅列だけど。

夜景。美しい。坂。多い。重力。ニュートン万歳。水。速い。子供。溺れる。

大体これでわかつてくれたかな。わからない人がいたら隣の気になるあの子に訊ねてみてね。

今のは、恐らく一般論的な部分で考える理由。

そして、姉ちゃんは本当にそれだけで不機嫌になるんだろうか。
ならない。

僕は何も知らない事だらけだ。

いろいろするね。そして、どうしようか悩んでいて、進みたい道も明確なのに、足踏みする僕にもつといいろいろするといつ、もう救いようのないループ。誰か助けて頂戴。

シリアルは慣れない。シリアルなんて僕のガラージャない。空気の入れ替えをしよう。吸つて、吐いて、吸つて、吐いて。うん、苔の匂いがする。緑の匂いって表現はあつていいのかな？

今、僕はガードレールの無い場所を伝つて川へと降りた後だ。

迷うのは辞めた。姉ちゃんに怒られるなら怒られようじゃないか。それは仕方の無いことだ。だけど、僕のことを嫌いになることはないだろう。だつてねえ。なんだかんだで、飯作ってくれるほどには優しい人なのだから。

十話（後書き）

次の更新は〇時でござります。予約投稿ばんにやあい！

十一話（前書き）

「いいところを元気配りができる女性はいいですね。私はそんな女性とお付き合ってみたいですね。女性とお付き合ってかしたことないですが。

川の水位は二センチとない。幅は二メートル程度である。地面は舗装されているはずなのだが、ところどころ割れていて、地面が見える。

そもそものところで、水がないところもあるので、僕の愛用のトレッキングショーズでも何ら問題はない。

僕は使い慣れないカメラを不格好にシャッターを押した。電子音が鳴つてフレームの風景が制止する。

ひび割れた壁から生い茂る雑草。

橋を下から見上げた写真。

川に差す木漏れ日。

水流で削れた川底。

とにかく、目に付くものはすべてシャッターを押した。押して、押して、押しまくった。僕自身、これはいらないだろう。と思う風景でも写真を撮った。

川の下から見上げる団地は不思議な心地がした。すべて見上げる形。なんだか、位置が変わるだけで、こうも印象が変わるものなのだな。

上流からは水の勢いが増してきて、足をしたたかに濡らした。じくじくと冷たくなつていく足にたまらない不快感。

川底に根を生やしたかの様に、足が動かない。先が遠くまで続く川は、僕が抜け出せない洞窟に入り込んだかのような錯覚を与えた。

今なら、まだ引き返せる。

妙な反抗心なんて押し殺して、すべて優しいものに包まれていればいいじゃないか。なにも問題はない。なにも変わらない。問題ない……はずだ。

電話のコール。

応答する。

『ああ、私ですよ。私は岩屋君の大好きな亜子ちゃん部長ですよ～。嬉しい？ 私が電話をしてきて。すごい嬉しいんでしょ？ と私はうぬぼれて見る。なんで、私が電話をしているのかって言つとね、電話をしなくちゃいけない気がしたのよね。話をつなぐ的な意味合いで、私の電話は必要に感じたのよ。そして、さらにもつと重大なことがあるの。今ね、岩屋君の家の前にいるの。メリーサンじやないわよ。まぎれもなく、家の前にいるの。キミから連絡をもらつた後、大急ぎでゲームとかバックに詰め込んで、家に向かつたのよ。私はとても偉いと思うの。そして、偉いの。しかし、来てみれば何よ。玄関の外にいながら、わかるこの重苦しい空氣。何？ もしかして私は歓迎されてないんじゃないの。もう、岩屋君との約束を反故にして、家に帰つてゲームしたいんだけど、帰つていい？』

「却下です」

『だよね。岩屋君もガンバッテ』

「はい」

電話終了。

見えてないけど、部長は笑つた気がする。もしかしたら、これは僕の精神状態に起因するかもしれない。

ああ、なんて素晴らしいタイミングで僕に電話をよこしてくれるのだろう。なんて、単純な奴なんだ。僕つて奴は、たまらなく勇気づけられた。

カメラを片手に上流へと進んだ。

十一話（後書き）

今日はこれで終了になります。お付き合ってくださった方ありがとうございました。次の更新は22日18時からの予定です。

十一話（前書き）

実はこの話のモデルは近所の川です。

橋を三つ渡った。四つ目の橋を遠くに臨む。近づくにつれて、詳細が分かつた。橋の上は人が通る事を目的とした通路ではなく、車が通る事を目的とした重厚な作りの橋だつた。

ああ、やつちやつたよやつちやつた。下から見たらこんなにも迫力があるなんて思わなかつた。早まつたかもしれないなあ。

橋の下に広がるはトンネルだ。下は水がヒタヒタと満ちている。足を踏み入れたならば、濡れないわけにはいかないだろう。これ以上濡れるのは正直勘弁願いたいものだけど、そんなことにはかまつていられない。

今の僕なら大抵のことには突っ込んでいける。ドン・キホーテ程には勇猛には慣れないが、街中をうろつく不良にカツアゲされそうになつても無謀に応戦してしまいそなぐらいには勇気があるぜ。怖いけど。

頭の中で地図を浮かべる。恐らくだけ、このトンネルの出口は想像が付いている。あそこに出るのだろうなあ。あそこだよ。あそこだ。指示語じやわかんないだらうけど、僕はわかってるんだよ。だから、いいの。

ここから、三十メートルは離れた位置にある同程度の大きさのトンネルがある。たぶん、そこだ。間違つていたらどうなるかはわからぬけど。

奥を見る。ちょっと怖い。しかし、このまま見てたらまた部長から電話が掛かってきてしまうと思い、意を決して中に進んだ。さすがに何度も励ましコールはちょっとばかり恥ずかしい。

十一話（後書き）

次の更新は22日19時です。

十三話（前書き）

ちょっと長いです。不思議な話を田指しています。直視なんてしないんです。

時季から鑑みても、肌寒いということは想像が付きにくい事態だ。しかし、中は涼しかつた。いや、それ通り越して、寒い。体全体が湿り気を帶びてゐるからか……すごい寒い。ちょっと、後悔。勇気も萎えた。走つて逃げたい。後方から入つてくる太陽光が見えなくなつた。真つ暗だ。水の反射もあるのだろうけれど、まだ目が慣れてないから実質なにも見えない。このまま、ここにじどりまついたら暗闇による不安で発狂しそうなので前へと進む。

壁に手をついて、自分の居場所を確認しながらの移動なので、とても時間がかかる。場所の確認もなにも光が少ししか見えないのでから、こんなのは焼け石に水みたいな行為かもしけないが、何もないよりはいい。

ただ、僕が安心する為だ。

足元を確認する事がかなないので、深い水たまりに足を突っ込んだ。そのまま体勢を崩してしまつが、カメラを濡らさないように持ち上げた僕を褒めたい。だけど、だれも褒めない。当然。

こんなに暗かつたら何も描写できない。困つた困つた。シフトチエンジ。

視覚ではなく、聴覚と触覚を意識してみる。

左手で、壁に手をついて、右手にカメラを持ちながら前に進む。時折シャツターのフラッシュを使つて内部を確認してみる。歩いた感覚としてもつてそろ出口についてもいいころだろうが、一向に出口に着く気配がない。道に関しては一本道だつたから、迷うはずもない。不安になつてきた。もしかして、僕はとんでもない事態に陥つているんじやないか。

僕の歩く音。凹凸のある壁。音。壁。音。壁。僕の意識がこの二つだけに集約されていった。

異常を感じた。些細なものだつたけれど、それは異常だつた。

僕は足を止める。音が水の音が止まる。

何かが近づいてくる音がする。僕は動いていない。水を跳ねる音が近づいてくる。まぎれもない、音がする。何かが歩いてくる。僕はどうする？ 逃げるか？ どこに？ パーツク。だけど、動けない。

音は近付く。そして、通り過ぎた。

あれか、あれなのか？

あれが、秘密なのか？

秘匿していない秘密なのか。

やばい。まじでやばい。なんだってんだよ。数々の罵倒が僕の中で駆け巡る。その罵倒は僕に向けてだつたり、部長にだつたり、姉ちゃんにだつたり、世の中の理不尽にだつたり、なんでもかんでもだ。とにかく、思いつくものすべて。

思考の渦に巻き込まれていた僕は気付く。

足音が遠ざかっていない。

ああ。詰みだな。僕は死ぬのかもしれない。

今、僕は正体不明の何かに観察されている。僕に興味があるのだろうか。じつと見られている。不思議なものだ。眼球というのは、受容器官であるのに、視線という言葉が存在するように、力を持っている。僕の右半身がちりちりしだした。視線が痛い。

一步一歩。何かが近づく。

穏やかな呼吸音が聞こえる。ああ、生き物なのだな。幽靈じやないんだ。安心安心。何かが狂い始めた。僕よ落ち着け、ビーケール。湿り気を帯びた何かが、僕の体を触る。顔であつたり、胸であつたり、腰であつたりした。

一体どれくらいの時間そのままであつただろう。やがて、何かは僕に触るのをやめて、去つて行こうとする。なんで、僕があんなことをしたのかはわからない。触られている

時にその触覚が一種の安らぎをもたらしたのかかもしれない。ただ、僕は去つていく方向に向かつて、シャッターを押した。フラッシュが焚かれる。残像の形として、何かの後ろ姿は僕の網膜に焼きついた。

一瞬。遠ざかる音が止まつた。しかし、何事もなかつたかのようにして歩き出した。

僕は助かったみたいだ。

音が完全に聞こえなくなるのを確認するまでは足が動かなかつた。何か、電話があるかと思って、携帯を取り出してみた。

圈外だつた。

心細くなつた。

ここを出るために前進のスピードを速めた。

十三話（後書き）

次の更新は22日20時です。

十四話（前書き）

急な場面展開です。

家に帰ると、僕を迎えてくれたのはリビングで昼寝する部長だった。姉ちゃんの靴は見当たらなかつたので、どつかに出かけたのかかもしれない。

花の女子高生たる部長がこのよだな無防備な格好で眠るのはいかんせん問題が生じる。別に煽情的であるとかいうわけではない。だらしないのはいけないよね。ということですよ。

起こして、小突きまわしてやろうかと思ったが、紳士的な僕はそんな欲望を抑え込んで、ブランケットを掛けてあげた。漢文で似たような状況があつた気がする。この場合、毛布をかけた人間は処刑されたんだっけ？ 死にたくないものだ。

……結局あの水路での一件の後は早々に退散した。僕はあんな体験をした後に、上流へと上り続けることができる程に豪胆ではない。ネズミもびっくりの肝の小ささだぞ。よく、あの状況で心臓が止まらなかつたと心臓を褒める。僕が褒める。偉い偉い。

有給休暇でも与えて、ゆつくり休んでほしいものだが、そうはいかない。休んでもらつたら僕が死ぬ。だから、働け。

体中色々な液体で湿っていた。川の水、僕の冷や汗、何かの水。本当に諸々のものだ。

着替えを用意して、シャワーを浴びる。

シャワーを終えた後、部屋にそのまま引っ込もうかと思ったが、曲がりなりにも客人を置き去りにして部屋でくつろぐのは気が引けた。

一旦、部屋に戻りカメラのデータ整理をして、棚から一冊本を取り出して、その後に、またリビングに向かつた。部長がソファーに寝転がつてるので、対面のソファーで本を読んだ。

数ページ読んだところで、うつらうららし始めた。

眠気を否定することもないので、僕は安らかにそれを受け入れた。

十四話（後書き）

次の更新は22日21時です。

十五話（前書き）

乱暴な女の子は嫌いじゃないです。わがままな女の子も嫌いじゃないです。まあ、現実世界において触れ合ふ機会なんてのはほとんどないですがね。ちょっと今回は長いです。

頬に鋭い痛みが走る。

目を覚ました。

前方に見えるは、僕に馬乗りな部長。
どうやら僕は起こされたらしい。先ほどの僕の紳士的行動を読み
せてやりたいものだ。

すなわち、彼女は淑女ではないのだろう。

こんな乱暴な起こし方をするのは淑女ではない。

僕がはつきりしない頭で抗議した。それは言葉にもなっているか
怪しいものだったが、意味は通つたらしい。

「淑女の起こし方とはどんなものよ

「僕を優しくキスして起こすんです」

「それは、あれよ白雪姫だわ。そして、私が王子様。でも、今のキ
ミなら死んでも言つても疑われない程には顔色が悪いから、言
えて妙だわ

「心臓が止まつていらない自分にびっくりしています」

「それは良かつた。キミは生きてる。」

それは心底うれしそうな表情で言つ。おおおお。惚れちゃいます
よ？ 今のエロゲならスチルもんだな。

そんなに心配したのなら、あんな所に行くより指示するんじや
ない。と強い批判をしようと思つていたが、その顔を見ていたらそ
んなことも言えなくなる。

「……」

僕を見てくる。

「何ですか？ そんな熱っぽい視線で見つめて

「訊かないの？」

「何を、ですか？」

僕はとぼけた。

重いんだよ。隠しているものが重すぎる。蛇かと思つて尻尾掴んだら、龍だつたみたいな？

もういい。もういや。今日の僕はオフなんだ。何もしない。とぼけた僕をぽかんとした様子で眺めていた部長。ふと、悲しげな顔をした。

僕はちょっと罪悪感。

しかし、知つたことか今回ばかりは何があつてものみこめない。のみこんだら、冒もたれになりそつだ。

「そうだ、写真どうします？ 今の時点でソレの枚数ありますよ。データは入りますか？」

「そうね、じゃあ、データをもらいましょうか？」

そういつて、ポケットから「JAN」を取り出したのは黒光りするメタルカラーのUSBだった。

このUSBにデータを入れるとのことだつ。そのUSBを受け取つて、部屋へと向かう。部屋に入つて、扉をすぐに閉める。

「ひぐつ！」

「どうして、部長はそもそも当然かの」と僕の部屋へと入るつとするのですか？」

鼻にぶつかつたらしい。鼻を押さえながら部長は言つ。

「私の部屋は私の部屋。キミの部屋は私の部屋」

「どこのジャイアンですか」

「いいじやない。別にみられて困るものはないんでしょ」

即答できないのがつらいところだ。しかし、ブツは姉ちゃんたちの背ではどんなにガンバッテも届くところのありえない高みである。問題はないだらう。

「どうぞ。構いませんよ」

「最初から素直になりなさい。異性を部屋に招き入れるだなんて、オスとしてかなりレベル高い行為だわ」

動物扱いですか。

部長は勝手知つたる我が部屋とでも言つよつに、テスクトップの

前に鎮座した。

それに関して突っ込みを入れるのも疲れたので、敢えてスルー。

デジカメを取り出して、部長に渡す。

デジカメを受け取りながら、面白おかしそうに部長は続ける。

「あら、あらあら？ 私がパソコンをいじっても大丈夫なのかしら。あなたの秘蔵のファイルが私の手によつてつまびらかにされていく様をただ見学するというの？ そういう、変態さんなの？」

彼女はどうしても僕を変態にしたいらしい。ここで、いつそ、僕は変態です！ と宣言したらそれはそれで、面白そつなのだけど、やめとく。そのままだ。現状維持。僕よ、落ち着け。

僕の態度が気に食わなかつた部長がさらに言葉を重ねる。

「子戸葉ちゃんの証言では、弟が姉モノのゲームをこよなく嗜好しているの、と悩み相談を受けたんだけどなあ。なんで、そんな風に落ち着いているのかな」

ちらちらと僕の様子をつかがう部長。僕はそのようなエロゲ関連の物を持ち合わせていない。高いし。興味はあるけれど。

別に、姉モノに興味があるわけではないんだ。そこは誤解泣きよう。

彼女は僕の涼しい顔が気に食わなかつたらしい。頬が膨らむ。ああ。可愛いね。そのままの格好で固まつてください。いや、マジで。部長は强硬策にでた。

「ああ、そう？ そうですか。もういいや。悔しいから、今からキミのパソコンに大量のエロゲをインストールしてやる。ちなみにアンインストールができないように設定もしてあげる。優しい部長からのお糀な計らいよ。感謝してね。高かつたんだから。タノシンでね」

何ですか？ あなたはそこまで、僕を変態にしたいのですか？ いいですよ。いいですよ。了解しました。僕としてもエロゲに興味がないわけでもないので、願つたりかなつたりなんだけど。物事はそう上手くいかないものであつて、部長が取り出したるは姉モノのエロゲ。タイトルは控えとこう。かなり、問題になりそうだから。

畜生。今から、無理にでも事実を工作するつもりか！

あれをインストールさせられた日には、一生日陰物として生きて行かなければならぬ。日陰物というか、実姉に顔向けできない。畜生、義理のお姉ちゃん設定ならギリギリセーフなのかもしけないなあ。いや、アウトだな。やばい、僕の頭少々疲れてきてる。過労死するかも。頭だけ。

一つ、深呼吸。

椅子に座る部長を後ろから羽交い締めにして、抱きかかえる。本当に残念なことに胸はない。たわわな胸があつたらもみしだいてやうかとも考えていたが。残念だ。

そのままベッドに放る。

部長は可愛らじい叫び声をあげながら、ベッドへと強制ダイブする。

追い打ちをかけることなく、相手の出方を待つ。どんな反撃が起きるかわからない。

待つ。待つ。待つ。

動かない。

いや、ウゴイティナイ。

まずい。

何が？ いや、こんなネタ前もあつた気がする。おいおい、重複かよ。何やつてんだよ。部長さつさと起きてくださこよ。

部長は動かない。僕は動く。とても動搖。息が荒い。息が苦しい。僕の呼吸がうるさい。息を止めてみる。

僕の拍動がうるさい。心臓は止めない。だつて、死んじやうし。

ああ、でもここで、僕の語りは終了？ よつて、物語も終焉？

かつとなつてやつてしまつた。今は反省している。

ああ。僕は手紙を書かなくてはいけない。たくさんの手紙をだ。まずは姉ちゃんと書く。そして、母。部長の家族にも書かなきや。そして、あまり仲良くできていなかつたけど、クラスの皆さんにも手紙

を書こう。

「いまなら、言えるかもしない。

「部長。もう遅いかもしませんけど、僕は存外あなたのこと嫌いじゃあつませんでしたよ。その事を生前にお伝えする事ができなくて残念です」

「ふはあ！」

息を吹き返した。なんだなんだ。僕の妙な告白がミラクルを引き起したのか？ 安っぽいミラクルは正直お呼びじゃねえんだよ。「岩屋君。ベッドに転がされたくらいで私は死んだりしないわよ。ただ息を止めていただけ。私が死んだりしたらそれこそ、破綻よ。おいてけぼりがたくさん増えるわ

「おいてけぼりってだれですか？」

「キミと読者よ」

「何馬鹿なことをおっしゃるのですか？」

「馬鹿じゃないわ。ゆくゆくはこの事を小説として残していくと考えているのよ。私はね

付き合にきれない。

彼女が息を止めていたというなり、一分近くは息を止めていたことになる。酸素をたくさん必要としているらしく、肩で大きく息をしている。

うん。これでは僕が小さい子に無理やり悪戯をしているかのように思われるな。非常に遺憾だ。

部長の頬は上気、呼吸は荒く、視線は中空を漂わせている。今の僕たちを客観的にとらえてみよう。

呼吸を乱した男女一人。

かたや、うら若き乙女。しかも、外見は小学生。

かたや、性欲の権化高校男子。

何らかの犯罪的かほりがします。僕だって、かほりを嗅げる。ベッドに投げ出されて、あお向かから、首を持ち上げる形だった

部長が首の力を抜いた。

僕のベッドに部長の髪が扇形に広がりをみせる。なんで、田をつむるのですか？観念したわ。みたいな、その態度はやめて下さい。いやいや、これこそ気の迷いだ。僕が妙な雰囲気のまれていて、こんな考え方違ひを起こしているんだ。彼女はなにも考へていません。なにも起きていない。ただ、何かが起きているとしたらそれは僕の頭の中で起きているに違いない。

部屋に静寂が満ちる。

眠たげな眼差しで僕を見つめる部長。視線を外せない僕。そして、扉が開いた。

いつの間に帰ってきたのだろう？姉ちゃんが視線が固まっている。

家に帰つてきてみたら、弟が自分の友人とベッドの近くで、視線を交錯させていたんだ。そら、固まるだろう。現に本人達は今も固まっている。

「うーん。部屋君。恥ずかしいところを見られたね。良かつたね。今日はお赤飯だあ」

「ちょっと、部長は黙つてください。本当にお願ひしますから」僕の社会的立場を失墜させることなく、安全に立ち回る言い訳といつもの三秒で、七十一通り考へたが、すべて却下。とくに四十五番目の異世界への扉を探しているという設定はあまりにも痛々しい。僕まで心配される。

「あ、あの。姉ちゃん。少し僕に時間をくれないか」

「お黙り。あなたにはこれ以上姫子ちゃんと乳繰り合ひの時間なんて与えたりはしないわ。そして、あなたは黙つときなさい。これはお願いじゃないわ。命令よ。

ねえ、姫子ちゃん？弟に何をされたの？」

部長は顔を赤らめて、田を背ける。

「そんなこと、いくら子豆ちゃんでも……」

「まじろっこしいわ。はやく言いなさい。まだ私はあの一件を許しちゃいないわ。簡潔に、眞実を述べなさい」

さもなくば、といつ省略された言葉が想像できた。部長も恐らべ

同じだ。

「部屋に入つたら、後ろから抱きかかえられてベッドへといざなわれました！」

そう。と書いて、姉ちゃんは僕を見る。

「異論は？」

「いざないません」

間違つちゃいないし。巧みに言葉を使いやがつて。ついてきなさい。という言葉になにも抵抗できずに、しぶしぶと部屋を出て行つた。扉を閉めざまに部長に視線を送つたら氣力を失つたかのようにベッドに倒れ込んで寝息を立て始めていた。そうだ。彼女は昨晩徹夜をしていたらしい。なるほど。寝不足はいけないよね。僕が不幸になるから。

十五話（後書き）

次の更新は22日22時です。

十六話（前書き）

私はロリババアのつばさあとかゆうしますが。現実を見てます。田
乳もすきです。

「別にね、お姉ちゃんとしては弟の為にお赤飯を炊くのはやぶさかではないわのよ。だけどねえ……ロリコンというのはいさかきついわ。勿論、亜子ちゃんが戸籍上は成人を迎えているのもよくわかつているわよ? だけど……ロリコン。いや、ペドフィリアとまでは言わないわよ。そういう、性的倒錯嗜好というのはいただけないわ。生殖行為というのは知性のある人間にとつて、一定の愛情表現の一種だというのは私も重々承知のつもり。やっぱり高校生の身分じやね、物を贈つて、自分自身の気持ちを表現して、好意を示すのは難しいわ。

だからかしら。ああいつ風に愛情を表現したかったんだと思うわ。だけどね。やっぱり大事なことだから性急な事態はいけないわ。ええ、絶対にいけないわ。今まであなたが生きてきた時間以上に共に過ごしていくかもしだれない相手なのだから。

お互いを大事にしないといけない。お姉ちゃんはそう思います。それなのに。

あんなに……、息を乱して。とにかく軽々しいことはやめなさい。私が言いたいのはそういうことです」

腕を組んで、優しげに諭すようにしてみたり、次には強い口調で熱烈に語つてみたり、またまた次には顔を赤らめてみたり。姉ちゃんの様子は背伸びしながら大人ぶる子供を思わせたなあ。出ちゃいましたよ。詠嘆。

とにかく、言つといづ。これで、万事解決。

「僕は巨乳が大好き!」

渾身のシャウトだった。

十六話（後書き）

次の更新は22日23時です。

十七話（龍巣也）

怖いお姉ちゃんもいいものです。不思議な感じが好きなんです。
完全なるオナニー小説です。お楽しみください。

田乳宣言の後、僕は丁寧に時間をかけて姉ちゃんの誤解を少しづつ解いていった。

「ようするに、あなたはロリコンでもペドフィリアでもないのね」という言葉で事態の收拾はついた。この結末に至る時の、姉ちゃんの安堵とも不満ともとれる妙な表情に関しては、あまり考えない畜生、何が不満なんだよ！

疲れた。寝る。と姉ちゃんに申告して、昼寝の続きをしようとする。

自室では部長が寝てるだらうから、ソファーに寝転がつた。姉ちゃんが「姫子ちゃんの隣で寝ないのかしら?」といつ、発言は無視して眠つた。

夢現の中で、姉ちゃんが台所で立ち働いている音が聞こえた。換気扇の回る音。フライパンの油がはぜる音。何かを焼く音。それらを何かの音としてではなく、ただの音として呆然とじらえていると、音が止んだ。急に寂しくなる。音がしないのが寂しい。不覚にも夢の中でも瞳が潤んだ。おいおい、こんなもん見られたら恥ずかしいな。再び音がした。

音の中に、とつとつととつとつ足音が遠ざかり、一時するとまた近づく。遠ざかる時は、おこてけぼりにされたかの様な不安が心に湧き上がり、近づいてきたときは温かな陽が差したかのよつて穏やかな気持ちになつた。

一度二度。名前が呼ばれた。落ち着いた雰囲気の中にある小鳥の様な調子の声は姉だ。僕自身が呼ばれているのだ。という事に気付くのは五度目の時だつた。

「あ、起きた」

声で優しく起こすあたり、姉ちゃんは淑女としての素養があるようだ。

「そう、僕は起きた」

「いや、私が起きたんだから。」」飯できたから、食べよつ」
席に座った時に思い出して、時計を見る。

まだ毎過ぎだ。

「姉ちゃん、部長は？ 食べないのかな」

「ああ、亜子ちゃんはまだ眠いらしいから放つておく」

そう。と言葉を残して、目前の献立に視線をやる。

固くなり過ぎない程度に配慮された炒り卵を、柔らかいバターロールに詰め込んだものだ。上には、ケチャップが掛かっている。シンプルが一番。これは上手いのです。隣には牛乳。そして、やうに隣には簡単なサラダがある。

朝食みたいなメニューだ。僕にはバターロールが三つ。姉ちゃんには一つだった。

「姉ちゃん、一つ多いよ」

「いいのよ、これで」

そういうやいなや、姉ちゃんはバターロールを口につけに頬張つた。

なにか、気に食わないことでもあるのだろうか。世の中には気にくわないことが溢れているものだ。しかし、姉ちゃんの気にくわない事態というのが、もしかして今の僕にあるのか。それは、残念だ。姉ちゃんは卵がたっぷり含まれたバターロールを一口に頬張つたのだから、そのほつぺはとんでもないことになつていて。リスの様に膨らんでいる。尖ったものでつづいたりしたら、破裂しそうなほどにパンパンだ。つつかないと。

頬パンパン。鋭き眼光。姉ちゃんはおもむろに両腕を胸の前で組みながら、僕を睨みつける。

何か、訊きたいことがあるけれど、訊こうにもそのタイミングが分からぬ。と言つた様子だ。何かを計りかねているようだ。

僕としては姉ちゃんのそのリス顔は可愛いものがあるから、それを見ながら、バターロールを食べ続ける。

食べる。食べる。食べる。見つめる。また、食べる。食べる。

あ。姉ちゃんが嚥下した。少しづつ食道に通せばいいのに。何を思つたか、まだ十分に咀嚼していない物を嚥下したらしい。僕が見ついてもわかる程に、喉が上下して、必死に食道を通りて。『ぬう！ ああ！』という風にうめき声をもらしながら、食事をしている。急いで傍らの牛乳を飲み、胃袋に運び込まれるバターロールの潤滑油としていた。

対面にいる僕に聞こえるほどに立て続けに喉を鳴らす音が聞こえる。よほど苦しかったのだろうか。大変な面持ちになつて。食事で死ぬとか勘弁して下さい。その間も僕を見つめるのは忘れていないらしい。いや、何がしたいんですか？

「姉ちゃん、そんなに見られると恥ずかしいんだけど」

本当は別に恥ずかしくないけど。

「私は恥ずかしくはないわ」

「なんか、キモいんだけど」

「私はキモくないわ」

どうしようもないね。僕がどう思うかではなくて、彼女がどう思うか、らしい。

「食事をしながらで、いいから。私の話を聞いて」
バターロールが口の中にあつたので、首肯した。

「世の中にはね、かくしておきたいものがたくさんあるの。ベッドの中にある工口本とかもその類だと思うわ。だって、あるのは確實なのに、それを暴かないのは人情といつものもあるだろうけど、もつと、極論を言えれば。それを指摘することで誰も利益を得ないからよ。あんたが私に工口本の所有を指摘したとしても、ただ気まずいだけでしょうが。なにが言いたいかというと、人はすべてを知らなくても生きていくってことよ」

どう思う？ と姉ちゃんが訪ねた。

僕もバカじゃないから姉ちゃんが言わんとしていることは理解している。しかしね、理解してみたら、してみたで、一つわかる。

むつちや 不愉快。

だけど、姉ちゃんの様子をみてたらそんなこと言えない。今にも泣きそう。僕は何をすべきか。どうなりたいのかは想像がつくんだ。しかし、どうしたらいいのかといふことはわからない。

「僕もそれにはおおむね同意」

黙つておく訳にもいけないので、話を始めた。もひ、口よ好きにうごけ。

「なら」

「でも、気に入らない」

沈黙。

一瞬にして変わる。空気が変わる。姉ちゃんの様子がしおりしいものから、怒りへと変質した。

「私は不機嫌」

「見れば、わかる」

「しかも、超がつく」

「うん、久しぶりにみた」

「何が、私を不機嫌にさせているかわかる?」

「まったくもつて想像がおよばないところだよ」

「……そう」

膨らんだ風船が割れたようだった。特別大きな音がした訳じゃないけど、僕の心はすぐみあがつた。

部屋中に感情が霧散して、姉ちゃんの表情は諦観だ。あきらめたんだ。何を諦めたんだろうか。僕は理解しえない。そして、理解しないし、理解したくない。積極的に訊ねようとは思わないし、思えない。すべて受動的だ。僕も姉ちゃんも。相手が訊ねるのを待つている。

「ああ、むつちや 不愉快。」

「『うそつき』。美味しかったよ」

食器を流し台において、部屋に戻った。

十七話（後書き）

次の更新は23日18時です。 本日もお付き合いいただきまして、
ありがとうございます。

十八話（前書き）

親しい人を名前で呼ぶというのは大事なことですよね。

大どんでん返しつていいよね。という話題を部長としたことがある。

創作物には劇的要素を足すのがちょっとした工夫だ。

ロールプレイングゲームで言つなら、初期の頃から相方として組んできた仲間がラスボスだつたりするし、恋愛小説で言つなら、燃え上がるような恋をした男女が実は息別れた弟姉だつたなんて話は枚挙にいとまがない。話に何らかの起伏を持たせるためにそのような手法がある。

しかしね。そう言つのは物語の終盤にかけて徐々に明かされるのがよろしいのだよ。

恐らく、ラスボスは部長だろつし。姉ちゃんに至つては息別れたなどといつドラマティック要素は皆無である。

まあ。前書きはこれくらいにしどうか。これから、前哨戦です。僕の心臓持つてくれたまえ。

僕はノックをした。本来僕の部屋なのだから、ノックをする必要なんてないんだ。だけど、やっぱりねえ。ルールというかなんといふか。そう言つた、ゴング的な合図がないと締まらないよね。空気が。

ほら、現に今だつて、部長であるう何かが、部屋でぱたぱたしている。静まつてから、僕は入室。

部長はうつ伏せで転がっている。僕のベッドで。どうじよつか。

これは了承のサインですか？

僕はお断りだけど。もっと、胸が大きくなつてから誘いなさい。怖くて言えない。心の声。

彼女は狸寝入りをかましている。あの騒音をたてておいて、まだ寝た振りをしようという部長の心意気に強い感銘を受けたので、そのまま無視。デスクトップの前にある木製の椅子に腰かけて、写真

の整理を始めた。

一枚一枚写真を見ていく。実際僕としては写真とかは門外漢なので、良し悪しという物が想像つかない。すべからく素人が撮った僕の写真なんて、鑑賞に堪えない代物ばかりだろう。

よくわからなかつたんで、すべてのデータを黒光りするUSBに入れた。

今日撮つた写真をスライド形式にしてみた。撮つた順番に写真が表示されるのだ。

順繰りに表示される写真をボウっとした様子で眺めながら、声に出して訊いてみた。

「ラスボスつて部長なんでしょうね」

後ろのベッドでもそもそと動く音がした。そのまま、ベッドに顔を押しつけたまま返事が聞こえた。

「さあね」

「寝た振りはもういいんですか？」

「ツツコミしてくれないから、もうやめた」

「あれはツツコミ待ちだったんですねか。何とも分かりにくいボケをしてくれますね」

「岩屋君さ、もしかして機嫌悪い？」

「どうしてですか？」

「なんか、刺々しい」

「気のせいですよ」

本当はわかつてゐる癖にな。白々しい。このラスボスがあ。

部長はベッドから降りて、僕の隣においてあつたデジカメを手に取つて、またベッドヘスプリングの音をきしませながら戻つた。巣穴に引っ込む小動物みたいだ。

「違う話をしてもいい？」

「どうぞ」

「なんで昔みたいに、私のことを名前で呼んでくれないの」

「逆に聞くなれば、なんで部長は僕のことを名字で呼ぶようになつ

たんですか

「それは、岩屋君が呼び方を変えたからよ」

「ああ、そうだったんですね。気づきませんでした」

「気づいていたけど。

「あれですね。僕が呼び方を変えた理由はですね。変化が欲しかつたんですよ」

「変化？」

「そうです。変化。変容。チエンジ。そういうふた諸々がほしかつたんです。部長は欲しくないんですか？」

「私は…………どうだらう？」

「欲しくないわけないじゃないか。悲しくならないのか。いつまでたつてもその成長しない身体を抱えたまま生きるのは。僕は耐えられないけどね。

「とにかく、僕は変化が欲しかつたです。僕は文芸部に入部することを決意させられたあの瞬間から、あなたに敬語を使うことを決めたし、何が何でも部長と呼びましょう」

「私はさ。いつになつたら、岩屋君を名前で呼べるようになるのかしら」

「それはあれですね。僕が文芸部を辞めた時か、高校を卒業した時です」

「何それ。ひどくない」

「全然これっぽっちもひどいとは思わないです」

「岩屋君は勘違いしてる。それはそれは大きな勘違い。私という人間は確かにちょっと正常とは言い難い人間だわ。身体の成長は一切見られない。衰えも感じない。強くなつた気もしない。常に一定。何も変わらない。だけど、私の周囲は変わつているわ。現に岩屋君の身長はぐんぐん伸びてる。いつだつたかしら、私と子戸葉ちゃんの背を追い抜いた時の君の誇らしげな顔を今でも思い出せるわ。変化は何も私の体の成長だけで感じられない。常に誰かが隣にいないと変化は実感できないのよ。私は十全に変化を楽しんでる」

うおお。何ですか？ いきなりクライマックスですか？ いや、まだだ。まだだよ。まだ終わらせない。だって、まだやりたいことの半分も進んでいないんだ。こんなところで幕を引かせてたまるか。満足したらいけない。そこで止まる。

満足するな。絶対にいけない。

不満を持とう。

現状に不満を持とう。

探せ。

現状に対する最善を探せ。ないなら、作れ。

僕は強い怒りを持つている。そして、困惑だ。僕が撮った写真。スライドショーはもう、既に三週目だ。

一度として見ていない。

僕は最後の写真をみていない。

「部長。何かパソコンいじりましたか？」

「うん。あれよ。エロゲをインストールした」

しばらくくれるか。空とぼけた声だすな。毎週殺人が起きてしまうアニメの主人公みたいな白々しさだ。ちなみにエロゲは後からプレイします。

「部長。カメラを返してください。今すぐに」

「なんで？」

「悪い予感がします」

「そう。んじゃ、返すわ」

案外あっさり返してくれた。なんだなんだ。僕の焦りは勘違いか？
ああ。やられた。足りない。いろいろ足りない。

「部長はゲーム好きですよね」

「ええ。かなりやる方よ」

「そうですね。僕も良く知っています。そして、ゲームに必要な物つてなんでしょうか」

「それは、情熱よ」

「いえ。必要なのは記録媒体です」

「ああ、直点」

「メモリー返して下せー」

「オーケー。返そうね」

そう言つて、部長は「えい！」と、何かの破碎音をさせて、僕の机に記録媒体だった物を返した。

「部長」

「『めんちやい。私。ドジっ子。許して』

なんで片言なんだよ。そこまでする部長の動機がわからない。これつて、姉ちゃんの私物だぞ。僕のせいじゃないからな。しかし、謝るのは僕なのだろうな。しかも、あんなことを言った後だ。何とも気まずい。

僕はなんで、部長がデータを破損したかは訊いたりはしない。絶対に訊かない。

「僕はやさしいです。部長がどうしてそんなことをしているのかな
んて、問い合わせん」

「ありがとう」

「今から、出かけましょー」

ぽかんとした様子で部長が僕を見つめる。

「データ?」

「似たようなものかもしません。今から、電器屋に行きます。勿論、料金は部長が払ってくださいね」

「…………」

「どうしたんですか」

「吉屋君さ。案外ヘタレじやないんだね。知らなかつた」

「これも変化の一つと言えるでしょう」

小さい子に金をせびりとつているかのよつて見えてしまつ」とは非常に遺憾だ。

僕と部長は近所の電器屋へと向かつた。

十九話（前書き）

歩幅を合わせるとこりの歩幅を合わせるみたんなものかと思いま
す。

日は中天を過ぎて、次の日の朝に備える為に東へと落ちていく。
だけど、日差しは強かつた。

「バスで行きますか。歩きますか

「そんなに急ぎの用事でもないのだから、ゆっくりしましょ、う

そういうと、部長はすたすたと歩き始めた。しかし、すぐにその歩みに僕は追いついて、先を歩くようになった。僕の一步は部長の一步半のようで、僕が一步歩くと、部長の足音が三歩した。

散步の時間。

僕という人間性は少々社交性に欠ける。これっていうのは成長における影響ではないのかもしれない。これはもう、一種の病気だと思う。本当に。学校が始まつて、一ヶ月が経つた今でも、クラスの人には話しかけられるとびくついてしまうし、僕自身クラスの人には話しかける必要性がある時は手に妙な汗がでてくる。極力、そう言った雑務に関わりを持ちたくないと考えていたら、さらに社交性をなくしていった。

そうしたら、必然的に僕は内に閉じこもるしかない訳で、その内側に待ちかまえているのは姉ちゃんと部長しかいないワケデ、しかもなんだかんだ言って、一人はやさしいワケデ、僕はそれから離られナイワケデ、僕には閉鎖的な人間関係にどしまつてしまふ井の中の蛙状態ニナルワケデ、僕は底の浅い人間になってしまウワケデスヨ。もうやだ。頭がいたくなる。

そう言つた状態は僕としてはやはり遺憾に思つ。だから、友達が少ない僕は友達をつくろうかと思う。

そうしたら、万事上手く行くんじゃないかな。いかんせん僕という人間には深くつきあつた交友関係というものがないから。周りの人達のように友達というのに囲まれて、生活していたら人並みみたいになるのかな。だけど、今更僕が社交性というものを獲得すると

いうことができるのだろうか。

などと、取り留めのないことをつらつらと考えていたら、いつの間にか歩調が崩れていた。部長は遠く離れたところにいた。ぼくの進路方向に向かってきているので、僕がはやく歩きすぎただけだ。

昔は僕が部長や姉に手をひかれて、歩いていた覚えがある。あの頃は、僕は姉ちゃん達を見上げていた。あの入達は僕を見下ろしていた。

これだ。このことを言つていたんだな。これは確かに変化だ。大きな変化だ。何も変わつていないことはないじゃないか。確実に変わつてゐるじゃないか。

しかしね。ここで、僕はあえて逆接を使用する。

察しの良い方はもうお気づきかもしない。僕の周りを取りまく人間達は明らかな矛盾を抱えている。だれもそれを指摘しないけど、まさかわかつていらないなんてことはないだろうさ。

ほら、僕たちは臆病だから。

部長のスニーカーの音。軽快でいて、今にも空を飛べそうな程の躍動感を持っている。

部長もつと、すたすた歩いてください。なんてことを僕は言わない。言えない。洒落になんねえし。身体的特徴を揶揄して楽しむ人間はすべからく死ねばいい。これはまじ。冗談じやない。胸は良いんだよ。僕の場合。大きい方が好みというだけで、小さい胸も嫌いじゃないから。だから、ノーカン。自分ルール発動。

「部長。すみません。少し速かつたですね」

「まったくよ。もうあり得ないくらいはやいわ。あんなに早いなんて考えられない。というかね、なんでもかんでも自分が楽しめればいいつて魂胆がどうかとおもうわ。そんな風に一人でいつちやつて楽しいの？ 私は楽しくないわ」

「元気そうですね。もっと、速く歩きましょつか」

なんだよ。シリアル大惨なのによ。僕、一生懸命青臭いこと考え

ていたんだぞ。格好悪いけど、真摯に物事に向むかひおつとめる若者らしい考えを披露していたのに、下ネタですか。『いややつをままでした。

近所の電器屋で田舎の物を購入して、後は帰る段となつた時は、家を出てから一時間くらいだった。

「部長、僕ちょっと寄りたいところあるんですけど、ついてきますか？」

「エッチいのはNGの方向で」

「そうですか。さようなら」

「うそよ。ついて行く。ところが、本当にエッチいものなの？」

「いや、ただの本屋ですよ」

十九話（後書き）

次の更新は20時です。

一一十話（前書き）

作家を志す人間は己のバイブルがあると思います。そして、それがこの家族は岩在英道だったということなのでしょう。

本好きの人間ならば、わかっていただけるだらう。特に目的もなく、本屋に向かうのは習性としか言いようがない。虫で言つていうの正の光習性だらう。あえて、何か言つなれば正の本屋習性。理解しがたいなら、周囲の読書家に訊ねてみよう。異性であれば、尚よろしい。読書好きなあの人と距離を縮めるチャンスだ。新しい何かが始まるかも。

僕も部長も曲がりなりにも文芸部に所属しているわけなので、本は嫌いじやない。むしろ好きだ。活字の魅力やばい。もう、メロメロ。

広いフロアを贅沢に使用した、清潔感溢れる大型書店も悪くはないが、狭い面積を有効活用せんと必死の努力がうかがえる小さな店構えの方も好感が持てる。天井を貫かんばかりに並べられた古本の数々は僕を充足させる。本に囲まれている感じがたまらない。すげえ、興奮してきた。

気分的に今日は大型書店より、古本屋へと向かいたい気分だつたので、古本屋に向かつた。

開け放された扉をくぐると、大量の本棚が僕達を迎えてくれた。僕は僕の興味のある棚へと、向かい。部長は部長の興味のある棚へと向かつた。

何を買いたいというわけではないけど、こいつら時は自分が好きな作家さんの本を探してみたりするものだ。

なんとはなしに、あの作家を探してみる。
か行の最後のあたり。

岩在英道。なんとなく、僕の名前の中屋に似ているようを感じるから、妙なシンパシー。

異常があった。

岩在英道の作品は基本的に古本にでることはない。理由は熱狂的

なファンが彼の本をほとんど手放したりしないのだ。

古本屋で見かけるのは稀なことだ。そして、今日は稀な日らしい。

一つの本棚がすべて、岩在英道で埋まっていた。

11話（後書き）

次の更新は21時です。

11+1話(前書き)

女の子をだらりとしていたり、つまらない生活がしたいです。

不可解な事象にはなにかの作為があるものと考えていいらしい。と何かの本で読んだ。ん？ 岩在英道だつけ？

いやまあ、それはどうでもいいわけで。この事象は明らかに不然だと僕は思う。ラスボスの企みでもあるのだろうか。

もしかしたら、これが僕の計り知れない範囲のことという可能性もなきにしもあらず。ということを考えてみる。無知の知だつか。ソクラテスさんをリスト。世の中には知らないことの方が多いと言うことを僕は知っています。ていうか、今日の午後にそれを実感したし。

「不自然ね」

おお、部長もお墨付きの不自然！ 僕一人ではなんだか、不安だけ心強い。

「岩在英道の蒐集家が本棚の整理でもしたんですかね？」

「なんですよ？」

「それは……ほら、春だから」

「訳わかんない」

「すんません、僕もよく訳わかりません」

なんか、意味深な言葉をはきたかつただけなんだ。

「何で、そんな前後不覚みたいなバカな事するのよ

「いやあ、春だから」

「…………」

おお、すごいぞこの口癖。部長を困惑させている。目の色が怒りから、不安になっている。

ちょっと、優越感。

僕がふふんと笑うと、鳩が豆鉄砲食らつたかのような顔してる。爆笑。心の中で。性格には一人だから、爆笑じやないんだけど。あれ？

「部長。どうしてここにいるんですか？」

娯楽小説「コーナーはこっちじゃないぞ。

「私を娯楽書籍コーナーで抱いてほしいの」

「なんだ、こり。性の娯楽ですか。勘弁してくださいよ。上手くないから。

「なんとも、魅力的なお誘いですね」

胸があれば、とびついただろうになあ。出ましたよ。半実仮想。

最近の僕は古典に通じているわけでもないのに。不思議なものだ。

「何？ その手は飾りなのかしら。その手の役目を十全に果たしながら」

「もう、たまりません。僕は我慢できませんよ。もういいんですね、わかりました」

もう辛抱タマらんですたい！ とか言つて、何とか三世の様に飛びこむことができたら、それはそれで面白いのだろうけれど、そんな脚力は持ちえないでの、落ち着いて、冷静になつてみる。

部長と共に娯楽書籍コーナーへと向かつた。

部長は周りに人目がないのを確認して、僕に腕を掲げた。それは幼い子が親に抱っこをせがむような仕草だ。

「部長、カメラがありますよ」

「人じやなかつたらいいわ。視線を感じるのがいやなのよ」

カメラ越しなら見られてもかまわないのでか？ ちょっと、変態はいつてるな。あんまり近づかないようにして」といふ。

僕は部長の脇に手を入れて、持ち上げた。部長は宙うつになるような形で僕と向かいあう。

「岩屋君。君ね、私と向かい合つ形じゃなくて、本棚の方に向かせなさいよ」

そうだ。彼女は僕を使って、棚の上段の本を探そうとしているのだ。部長や、姉ちゃんと本屋に行く時はそのようなことを頼まれることが多くある。

部長は僕に抱きあげられている様を誰かに見られるのは気に入らない

ないらしく、いつも周囲への視線の気の配り方は尋常ならざるもの
をうががえる。やはり、抱きかかえられている姿というのは恥ずか
しいのだろう。実を言つと、僕も恥ずかしい。

一一一話（後書き）

次の更新は、明日の三時です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6770y/>

部長も僕も嘘つきな小説

2011年11月24日21時22分発行